

図書館だより

主な内容	頁
出 会 い(寄稿) …………… 学 校 長 五 百 簾 頭 眞 …… (337)	
図書館長の推薦図書 ……… 図 書 館 長 影 山 好 一 郎 …… (339)	
教官著書の紹介 …………… 情 報 工 学 科 生 天 目 章 …… (341)	
「防大生に読んでほしい本」の紹介 …… 図 書 館 事 務 室 …………… (343)	

『出 会 い』

学 校 長 五 百 簾 頭 眞

人間は「小宇宙」であるという。「たとえ我が身は独房に閉じこめられようと、我が魂は、世界を自在にはばたくことができる。」とハムレットが豪語する台詞がある。それは修辞であろうが、真実が含まれていないわけではない。実際に牢獄の中で人間的に大きく成長する事例はある。明治10年の西南戦争に呼応する政府転覆計画に陸奥宗光は連なり、翌年、投獄された。獄中、陸奥は猛勉強を始めた。課題は、日本国家いかにあるべきか、であった。反乱によって明治政府を打倒しようと血気ばかり先走った自己を、陸奥は恥じた。近代国家としての日本は可能か、日本なりに西洋文明諸国と肩を並べて歩めるようになるには、何をなすべきか。陸奥は蟄居幽閉の境遇を逆手にとり、最も不自由な身を最高の機会に変えた。人間、面白いもので、どんな境遇も心の持ち方一つで、正反



対の意味を持たせることができる。史上の偉大な人で逆境に耐え、それに鍛えられなかった人はいない。多くの人は順境に支えられ、逆境に沈む。逆境を自らを鍛える好機ととらえ直す思考転換のできた少数の人々が、真に立派な人、偉大な人となれるのではないだろうか。

さて、陸奥が獄中猛勉強をしている。英国の政治学・国家論に関する原書を読破し、名著を自分の手で邦訳までしている。その噂を耳にして、心騒いだ者がいた。伊藤博文である。あの時、陸奥らは伊藤を含む新政府要人を殺す謀反を計画した。数年後、伊藤は明治国家の憲法制度をつくる責任者となり、考えあぐねていた。誰か知恵のある者はいないか。問題が大きすぎて、誰も答えることができない。

「陸奥ならば、もしや。自分を危めんとした者ではあるが……。」伊藤は東北の幽閉先を訪ねて、陸奥と会った。日本国家のあり方を定めるべき伊藤は、陸奥が獄にあってこんなにも深く日本の将来を考え続けていたことを知り、感動した。「ここまで判っている者は、天下に陸奥だけだ。」と伊藤は唸った。東京に戻った伊藤は、権力を濫用して陸奥の獄を解き、西洋へ遊学させた。その後、伊藤首相の下で外相となった陸奥が、明治国家悲願の不平等条約改正をなしとげ、日清戦争期の対外危機に対処したことは、よく知られている。身は独房にあっても、魂は日本と世界を想い、

自由にはばたくことのできた一例である。

学生諸君のうちに、厳しい防大の勉学と訓練、そして規律に音をあげて、投獄されているみたいだ、強制収容所じゃないか、などこぼしている者がいるだろうか。おめでとう、君は陸奥宗光になる出発点に立っているかもしれない。

今の日本社会にあって、防大生はもっとも厳しく鍛えられている若者グループの一つに違いない。そのことを、私は日本の国と諸君自身のために喜びたい。外から課せられるものを自身の自由意志という内圧が上回る時、諸君は主体性あるリーダーに成長して行くことであろう。人間は学び、成長する。どんなに学んでも、使われている脳の部分は、限られているという。まだ使われていないところがたくさんある。人ひとりの中に、人類が獲得した全形質が潜在している。まさに「小宇宙」である。全人類の体・徳・知をわれわれが潜在的に保有しているにせよ、問題はそれを顕在化させるのが容易でない点である。

教育とか人材育成とか言うが、本人に即して言えば、「学習」である。本人になかったものを教師や他人が外から植えつける、と考えるはいけない。本人に潜在的にあったものを他者が開顕する契機を提供するだけである。本人に潜在力がない場合、どんなにいいことを言っても、馬の耳に念仏であり、豚に真珠である。

ある出会いによって、彼はめざめた、という。

多くの人のうち彼だけが新たな人生を歩み始めるのは、彼が潜在的にそれを望んでいたからなのである。

「真理は汝を自由にする。」という言葉が実感されるようなすばらしい講義、先生、教官の薫陶、先輩の熱き指導、同級生の友情と切磋琢磨、後輩を指導して初めて知る言葉の意味の深さ、そうした出会いのすべてが自らの潜在力を開く契機となる。防大生はバライティに富む関係と出会いに恵まれた若者集団であると思う。

他面、防大生が閑却しがちな出会いがある。名著との出会いである。実際に面識を得る人々との出会いはすばらしいが、なにぶん偶然

に自分が生れ落ちた場を中心に、世界人口の中の一点、人類史の中の一瞬に留まる。自らの潜在性を真に引き出すべき者は、それ以外にもあるかもしれない。それをカバーするのが読書である。全人類の知的、文化的財産が書物の形で残されている。インターネットで瞬時に集める情報は実際面で不可欠であるが、自らの魂をじっくり養うのは歴史の風雪に耐えて生きる世界の名著である。防大生が忙しく過密スケジュールをこなしていることはよく判っている。しかし、大きく自身の潜在力を開花させる志のある者は、時間をつくって図書館に赴き、人類史上の友と語る出会いを持ってもらいたい。

~~~~~ 図書館長の推薦図書 ~~~~~  
『武士道の逆襲』



著者 菅野 覚明  
講談社 (2004年)  
図書館長 影山 好一郎

武士道に関する新たな著述・図書が、近年、とみに書店に立ち並んでいる。「武士道」は「武士の心構え・思想」である。すでに武士の実体がなくなったのだから、その武士道なる思想も自と消え失せてもおかしくないのに、今なお日本人の心の奥底に等しく沈殿しているように感じるのは、決して私一人ではない。

それは武士道のもつ重さと不思議さを物語っている。翻って、人間の“基本”が身につけていないような犯罪が多発する現在だからこそ、その重たい武士の高い倫理観と真剣な生き方を、国内社会が求めているようにも見える。

戦前の著述は、武士道の母体、忠節の意義、山鹿素行の土道、葉隠の武士道、吉田松陰、水戸学、大道寺友山、そして明治武士道などを主たる対象としており、武士道の淵源と同時代の思想の説明に重点が置かれたものが多いようである。重要なことは、読者が求めているのは、武士道の時代性や個別性に留まるのではなく、より広がりをもった普遍的な論理である。この意味からすれば、その普遍化を試みた論がはじめて世界に発信されたのは、新渡戸稲造の「武士道」であったといえる。その後、これに類するもの、あるいは、世界的発信の挑戦を試みたものはほとんど見あたらないといえるが、その中で、本書、菅野覚明『武士道の逆襲』は、目立った存在である。

本書の特徴は三つある。一つは、著者は、新渡戸稲造が倫理道徳を強調した「武士道」は、武士の実体とは全く関係のないものであると批判するとともに、中世、近世、近代の多くの日本の古典に触れ、武士の実体に即した論理を展開していることである。武士の実体は、斬殺し斬殺されるという戦闘を基盤にした生活にある。時代こそ違え、刀を使わずとも、生きることそのものを戦闘と位置づけ

ることが、現代にも通ずる普遍化の基礎となる。本書はこのことを暗示している。二つ目は、武士道は戦闘が本業であった中世の「武士道論」と、人を切る必要がなくなり安定期・近世に完成した「土道論」という、江戸期に展開された二つの論争を紹介し、比較検討を行い、双方の同質性と異質性を整理する一方、明治武士道が日本近代化に与えた影響、効果、功罪などを明確に解説している。そしてこの質の相違を形成している要因と、逆に武士道の普遍性を把握する上で重要な論理的な柱（強さ、実力、表現、きっかけ、脇差心等）をわかりやすく捉え説明している。三つ目は、武士道の普遍性の抽出を、明治武士道の分析によって試みたが、その回答に至る“堅固な筋立て”が得られなかったことを示唆している。結局のところ、明治武士道とは、軍の統制、対外戦争といった待ったなしの「武」の課題が先行する形で形成された国民道徳が、西洋人の好奇心と結びついたところに成立したこと、さらに当事者たる武士はおろか、儒教的な武士道徳をも突き抜けた、全くの観念と化したと結論した。これは明治武士道が本来の武士道から大きく歪められたものとなった一方、戦後に至っても、武士道解釈が未だに収束していないことと深い関わりをもっており、本書の価値を高めている。

本書は、以上の論点を中心に分析された稀有な武士道の研究書であるが、武士道の全体的な構造を捉えることが必要であり、それは

今後の課題として残されているといえよう。その全体的な構造を明らかにすることが、上述の普遍性を把握することでもある。この解決には、今後、人間が何かに向かい合い、対峙する人倫観をもって如何に生きるかという武術的な教訓と分析を必要としているように

考えられる。本書の分析は著者の経歴と豊かな研究実績に負うところが大きく、奇麗ごとではない真の武士道のイメージの把握と、さらなる読者の研究意欲を触発する貴重な書である。

~~~~~ 教官著書の紹介 ~~~~~

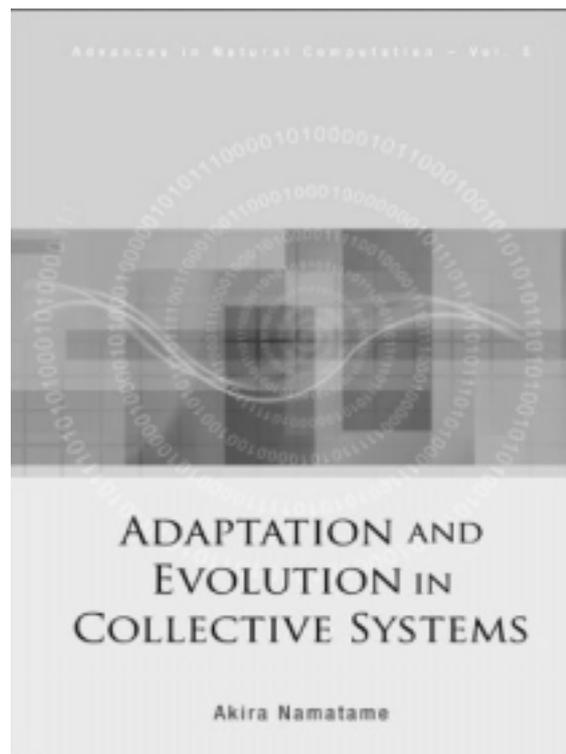
『Adaptation and Evolution in Collective Systems』

World Scientific (2006年)

情報工学科 教授 生天目 章

個人の合理的な行為が多数連結されると、意図せざる劣悪な結果を招くことがある。このような現象は、“創発”として知られている。例えば、車一台一台の小さな動きが共鳴し合うことで、交通渋滞は引き起こされる。他と比較してあまり差のない、ある特定の商品やアイドルが爆発的にヒットするのも、創発現象である。このように、意図しない結果を創発することになる要因は、要素間の相互作用に存在することがわかってきたのは、最近のことである。

システム理論の構築に多大な貢献をしたアシュビー(W.Ashby)は、“生きたシステム”が変化する環境にうまく適応することで生存し続けるには、内部に十分な多様性を持つことが必要であると、説いた。だが、多様性を維持しながら一つの有機体として機能していくために何が求められるのかは、あまりよくわかっていない。



私は学生時代に、“システム思考”の概念に虜になった。レズニック(M. Resnick)も指摘しているように、我々は集中的なものの考え方をする傾向が強い。だが、オームロッド(P. Ormerod)は、社会の問題を従来のシステム

的思考でとらえるのは誤りである、と警告している。社会現象は、どんなに複雑に見えても、その挙動を制御することは可能である、といった考え方は捨てるべきなのであろう。

システム思考の虜になってから30年以上経ち、今度は“ネットワーク思考”の虜になり、本書を執筆するきっかけになった。本書では、多種多様な要素（多元要素）が主体的な相互作用を行なうような系を、“collective systems”として扱っている。人間が織り成す社会は、機械系というよりは、生物系としての有機体に近く、要素間の相互作用に着目しなければ、全体的な挙動の本質を理解することはできない。相互作用とは、お互いに影響を及ぼし合うことである。だが、伝統的なシステム論は、個々の要素が他の要素から強い影響を受けるといった視点が弱かった、という視点に立ち、そして、“相互作用”をキーワードに、新しいシステム論を展開している。

共生（symbiosis）とは、他の生物から養分や危険からの保護などの利益を得る代わりに、その生物にとって何らかの利益を提供するといったように、異なる生物同士が相互利益を求め、そして共に生きることを意味する。例えば、藻類と菌類は、単独では生きていけないような最悪の環境条件におかれた時は、合体して一つの共生体となって生き延びることができる。近年になって、生物の世界における共生関係は普遍的であり、生物の進化にとって大きな役割を果たしていることがわかっ

てきた。

生物が環境に適応するとは、ある環境の下で、生存に有利な形質を獲得することである。例えば、クジラは、音波を出して獲物とする魚から反射してくるエコーを聞き分け、魚の方向や距離を知ることができる。また多くの魚も、戦闘機などが敵のレーダーに探知されないよう次第に改良されていくように、捕食者から逃れるうえで有利な性質を進化させる。そのことで、捕獲によって全滅することなく生き延びている。一方で、クジラも、獲物である魚の進化に対抗して新しい性質を進化させる。例えば、魚が大群にいるときは、クジラの音波はうまく機能しないらしく、そんなときは大きな音を出し衝撃を与えて大群の魚を分散させ、その後に、音波を使って獲物を追跡しているらしい。

相互に影響を受け合う多数の生物同士が、それぞれの行動や性質の改良をエスカレートしていくことを、“軍拡競争による共進化”という。病原菌やウイルスに感染すれば、宿主である動物は、病気にならないための性質を進化させる。逆に、病原菌やウイルスは、宿主の防衛戦略に対抗して感染性質を進化させる。抗生物質が効かない細菌が出現するように、細菌やウイルスの感染を防ぐ手段が開発されると、それに対抗して新たな病原体が進化するのも、軍拡競争による共進化現象である。

単独の生命体では到底不可能なことをやっ

てのける力は、異なる種の生物同士の軍拡競争による共進化によって生まれる。人間社会の営みも、生物社会における生存競争と同じである。国家、企業組織、そして個人間での権力抗争は永久に続くであろう。だが、単独での繁栄はあり得ない。時代の激しい時代変化の波を乗り越えるための社会的知性は、思想の異なる者同士が相互作用することで生じる、共生のための絶え間ない軍拡競争によって創発される、というのが本書の主なメッセージである。

物事の本質を理解するには、何らかのモデルを必要とする。モデルは、本質と思われる要素だけを抽出し、それらの間に存在する関係を記述したものである。多くの研究者は、

標準的なモデルを用いる。それは、そのモデルが優れているというよりも、多くの研究は、先駆的な研究を模倣することからスタートするためである。そのような中、今までとは異なる新しいモデルを構築するためには、多くの思考実験を重ねる必要がある。この著書の執筆に要した努力は、このための長い道のりの第一歩である。

私の持論は“研究成果は国際的に発信しなければ意味がない”である。そして、これまでに多くの学生が国際学会で発表することを後押してきた。本書は、数年にわたる自分自身の研究成果の国際的な発信である。

最後に、拙著を紹介する機会を与えてくれた関係者に深く感謝します。

～ ～ 「防大生に読んでほしい本」の紹介 ～ ～

3 役 4 部長 2 教務主事 6 学群長等から推薦図書を挙げていただきました。

| 書 名 | 著 者 名 | 出版社名 | 推 薦 者 |
|-----------------|------------------|---------|-----------------|
| 新版 戦後日本外交史 | 五百旗頭 眞 | 有斐閣 | 学校長
五百旗頭 眞 |
| 草のつるぎ | 野呂 邦暢 | 文藝春秋 | 副校長(事)
戸田 量弘 |
| 翔ぶが如く | 司馬 遼太郎 | 文藝春秋 | 副校長(教)
馬場 順昭 |
| アルピン・トフラーの戦争と平和 | 徳山 二郎 | フジテレビ出版 | 幹事
中村 信悟 |
| 自衛隊 知られざる変容 | 朝日新聞社「自衛隊50年」取材班 | 朝日新聞社 | 総務部長
丸茂 雄一 |
| 権威主義の正体 | 岡本 浩一 | PHP 新書 | 教務部長
渡邊 芳久 |
| 太平洋戦争 上・下 | 児島 襄 | 中央公論新社 | 訓練部長
矢野 一樹 |
| 秋山真之 | 田中 宏巳 | 吉川弘文館 | 図書館長
影山 好一郎 |

| 書名 | 著者名 | 出版社名 | 推薦者 |
|-------------|-----------------------|---------|---------------------------|
| オフサイドはなぜ反則か | 中村 敏雄 | 三省堂 | 総合教育学群長
川島 武 |
| 日露戦争の軍事史的研究 | 大江 志乃夫 | 岩波書店 | 人文社会科学群長
村井 友秀 |
| 日本・日本語・日本人 | 大野 晋, 森本 哲郎
鈴木 孝夫 | 新潮社 | 応用科学群長
小島 敬和 |
| 井上成美 | 阿川 弘之 | 新潮社 | 電気情報学群長
関根 松夫 |
| 帝王学 | 山本 七平 | 日本経済新聞社 | システム工学群長
奥山 繁樹 |
| アメリカの鏡・日本 | ヘレン・ミアーズ 著
伊藤 延司 訳 | アイネックス | 防衛学教育学群長
本村 久郎 |
| 三浦半島記 | 司馬 遼太郎 | 朝日新聞社 | 学術情報センター長
柳 繁 |
| 組織を生かす | 岡村 誠之 | 啓正社 | 安全保障・危機管理教育センター長
太田 文雄 |
| 日本の領土 | 芹田 健太郎 | 中央公論新社 | 総合安全保障研究科教務主事
真山 全 |
| 理科系の作文技術 | 木下 是雄 | 中央公論新社 | 理工学研究科教務主事
野口 泰明 |

N A D A L Bulletin Vol. 21, No.2

防衛大学校図書館だより 2007.3.

発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校図書館 Tel.046-841-3810

図書館長 影山 好一郎

編集庶務

石井 靖 孫 (図書館事務室)

飯島 幸夫 (図書館事務室)

印刷所

(株)アド・ワークス Tel.046-838-0555

〒239-0807 横須賀市根岸町 4-9-13

編集委員

中村 一成 (体育学教育室)

阿部 洋 (機能材料工学科)

田中 誠 (国防論教育室)